大阪公立大学共同出版会
No.44
NEWSLETTER
ニュースレター
Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目　次

- 大阪公立大学開学記念対談　西澤 良記・八木 孝司 … 1
- 第17回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告 …… 4
- リレーエッセイ(3)「闘病記は医療資源」　金井 一弘 … 4
- 自著を語る(37)「国際ソーシャルワーク入門」　東田 全央 … 6
- 自署を語る(38)「観光列車の経済的研究」　藤田 知也 … 6
- 自署を語る(39)「TANKA《カタルーニャ語短歌》私語」　小林　標 … 7
- 新刊書の紹介 …… 8
- 令和４年度　スタッフ一覧／編集後記 …… 8

大阪公立大学開学記念対談

公立大学法人大阪理事長　西澤 良記
インタビュアー：OMUP 理事長　八木 孝司

対談日：令和４年６月６日

本年４月に大阪府立大学と大阪市立大学が統合され、大阪公立大学になりました。これを機に西澤良記理事長と弊会理事長との対談をいたしましたので、掲載させていただきます。

＜大阪公立大学発足にあたっての抱負＞

八木理事長：本日はお忙しい中、貴重なお時間をいただきまして誠にありがとうございます。西澤理事長は、大阪公立大学に統合される以前から公立大学法人大阪の理事長をされておられましたが、４月に大学が統合されたことで新たな意気込みなどはございますか。

西澤理事長：今回、開学にあたり「総合知で、超えていく大学」をキャッチフレーズにしています。これまでの研究というのは、技術の発展を一番の目的として、人の幸せをあまり考慮していませんでした。今、研究が進み、技術のレベルは高くなってきていますが、何のために研究をしているのか。人の幸福をもっと重要視するべきではないか。すべての研究は、人の幸せ、つまりウエルビィーイングに資すべきではないか、専門知から総合知へ意識を切り替え、総合知の活用を今まで以上に重視し、『総合知＝イノベーション」に置き換えていくべきだと思います。今回、統合することで分野融合のレベルを上げ、融合の研究プロジェクトを推進していきたいと考えています。

また、教育面は、府大では10年前ぐらいから実施している「初年次ゼミナール」を全学的にやろうと考えています。全学的に200のテーマで、学部とは関係なく、少人数教育の授業です。20名程度の少人数というのがポイントです。その目的は、総合知を創るためのベースを作ることです。

もう１つは、「COIL、すなわち Collaboration Online International Learning」いうもので、海外の大学とオンラインで結び、１つの課題について少人数で英語によるディスカッションをするというものです。これには教員の協力が必要なので、少しずつ拡大していきたいと考えています。学生が主体でeラーニングをし、教員はリードしているだけで、初年次にする。ゆくゆくはこの２つを組み合わせることができたら良いかと考えています。

八木（以下職名略）：１年生の英語力で、初年次にやっていけるものでしょうか。

西澤（以下職名略）：大丈夫だと思います。できるだけ前期のうちに英語を集中的に行い、早いうちに英語の必要性を感じてほしいのです。本当は６月まで全部英語でやるのはどうかと考えているのですが、そうなると、教員の手が取られるので、実現はなかなか難しいです。英語は手段であるので、興味のある学生については、その後はアドバンストコースでやっていけばよいかと思っています。

COILのようなことをやらないと、学生に英語の必然性はなかなか感じられないのです。以前、私は、アメリカの大学に学生を１週間連れていったことがあります。できるだけ多

くの英語に触れ合うチャンスを与えたらよいと思うのです。
八木：大阪公立大学の学生はポテンシャルが高いので、チャンスを作ってあげたらよいですね。

＜公立大学の意義とは、使命とは＞

八木：ところで、大学には、国立・公立・私立があります。そのうち、公立大学は何のために存在するのかというのをよく尋ねられますが、西澤理事長はそのあたりをどのように考えておられますか。
西澤：公立大学であることの意義は、僕が学長になったときの一番の命題でありました。なぜ、公立大学が要るのか。橋下氏も自治体がどうしてお金まで出してやる公立大学を維持する必要があるのかと言っておりました（笑）。大学の使命は教育・研究・社会貢献です。それに加えて、本学は、大学構想の中の新たな機能として、「都市シンクタンク機能」と「技術インキューベーション機能」を確立したいと思っています。この２つの機能のなかでは①スマートシティ、②パブリックヘルス/スマートエイジング、③バイオエンジニアリング、④データマネジメントの４つを戦略領域として取り組もうと考えています。これらを設定し、大阪の知の拠点として、都市問題の解決、あるいは大阪の産業の競争力強化に貢献したいと思っているのです。

国立大学にそういった考え方もありますが、直接に自治体と手を結ぶことはなかなかできないし、またそこまで必然性を彼らは感じていないと思います。しかし僕らはそれを感じているし、それをやらなければならないと思っているのです。特に府市がやろうとしているスマートシティ戦略に関しては、森ノ宮キャンパスをその司令塔の役割の一環を担えるような形に持っていきたいと考えています。

大阪という都市の課題解決を一つのキーワードにしながら、産業の競争力などを高めていきたい。それに貢献できるようにしたい。そういうことからSDGsの事例を世界に展開していくというように考えているのですね。そういうことを頭に描きながら研究ベースを考えてやっていければいいと思っています。もちろん純粋な研究はどんどんやっていけばいいと思いますけど、そういう頭を大学としては持っていることが大切だと感じています。
八木：具体的な組織を作るのではなくて、個々が積極的に「都市シンクタンク機能」と「技術インキューベーション機能」を意識して関わっていくというイメージですか。
西澤：要するに、イノベーションアカデミーという形のシステムを作りたいと思っているのです。最終的には森ノ宮が本部になって中百舌鳥がハブになるというような形を、そしてリビングラボを中百舌鳥・杉本・阿倍野・りんくう、そして先々は森ノ宮の各キャンパスに設けていく。そして一体化した組織構造を持つように中百舌鳥にリビングラボ的な建物建てようという構想をもっています。建物を目的とするのではなくて、その中身を目的とするように思っています。

今は、森ノ宮キャンパスは、１期工事ですので、学舎の中にはこういうイノベーションコアを持ち込めないのですが、1.5期には、森ノ宮学舎の隣にもう一つ建物を建てる予定で、その建物はイノベーションコアを持ち合わせた建物になるのではと考えており、そこにシンクタンクの情報集積のようなイメージを考えています。これについては、現在、辰巳砂学長が中心に進めています。
八木：専任のリーダーを１人置いて、その人がメンバーを率いてやるという感じですか。
西澤：リーダーとして誰かが要ると思いますけど、むしろその下にいるサブリーダーみたいな人がより集まって一つのグループを作るというような形になるのかなと思います。僕がイメージしているのは、森ノ宮に大学と府市の共通のプラットフォームを作り、それに情報学研究科の情報学がかかわり、入ってくるというような形のコアができて、そこで例えば府市のデータとかそういうのも触れるような形を作ってもらい、そこに課題の集積をする。そして必要な課題のデータと研究者を大学内に求めていく、ということができるのではないかと思っています。なんでもかんでもできるわけではなく、できることからやりたいと考えています。

＜大学が独自の出版会を持つ意義は＞

八木：私はOMUPがNPO法人化した頃から関わらせてもらっています。総合大学にはだいだい付属の大学出版会がありますが、元々は大阪府立大学や大阪市立大学には出版会がありませんでした。NPOであるOMUPが今後も大阪公立大学の出版会として関わっていきたいと考えています。そこで、出版会の持つ意義に関して、何かお考えがありましたらよろしくお願いいたします。
西澤：大学出版会は必要だと思います。大学自身がその学術の発表の場を持っていることは非常に大事なことだと思いますけれども、なかなか運営は難しいというのは存じております。

研究成果を普通の雑誌等に簡単には投稿はできないけれども、大学の中でしたら比較的に気が楽で、申し込みやすいですね。また費用的にも安価なので、若い人たちが自由に投稿できて、そこからいろんな発展系が生まれるというのは、理想だと思うし、そうあるべきじゃないかなと思います。僕はいつでも言うのですが、やっぱり大学には、大学に行っている時に、何かジャンピングボードがあって、ジャンプしたい人は飛び出せるという、そういう装置が欲しいと考えております。そのような装置の一つになってほしいと思います。
八木：例えば学位論文ですね。博士論文の書籍化は外部の出版社では難しいので、大学出版会の仕事かなと思っております。また、大学の内向けであった大学史とか、研究成果のインタビューやエッセイ等を集めて本にして、全国の人に読んでいただくのも、出版会の役割かと思っています。授業で配るプリントなどを書籍化することも、大阪公立大学のオリジナル教科書として全国に発信できてよいのではないかと思います。

八木：先生がこれまで出版された本の中で、思い出深い本はございますか。たくさんの人に読んでいただいた書籍がありましたらご紹介いただけないでしょうか。

西澤：以前、『私のカルテ』という欄で記事を毎週書いてほしいと日本経済新聞社に言われたことがありました。でも私一人で毎週連載するのはとてもきついので、友達３人に入ってもらって、４人で分担をして、月１回で７年半続けました。その連載記事の私の部分のみを集めて書籍にしたものが「痛い、だるいは生活習慣病のサイン」（講談社プラスアルファ新書ISBN978-4062722247）で、本の原稿はほとんど新聞記事なのですが、それに治療の方法とその予防について少しずつ書き加えて書籍の原稿として完成させました。

生活習慣病はサイレントキラーって言われていたものです。「静かなる暗殺者」とは言っても、「痛い」「だるい」というサインはあることを伝えています。色々な病気の色々なケースを、一人一人のカルテから抜いてきたもので、ほとんど実在の話を書いています。

例えば痛風ですが、30代のサラリーマンの方の足が腫れて、病院に来られ、診察の結果、痛風だったことがあります。その時の引き金が面白かったのです。その方は足が痛かったけれども、日曜日に子供と遊園地へ行く約束していたので、無理に靴をはいて１日歩いたらすごく腫れてきたので、月曜日に病院に飛んで来られました。お酒はいけないというけれども、歩いて動くことそのものが刺激になるというような話なのですが、キーは30代の普通のサラリーマンということです。痛風という病気は、以前は一般的には高齢者の美食家であまり移動をしない方の病気で、“帝王の病気”と言われていたのですが、最近は若年化してきています。その原因は食事がかなり偏ってきていることが大きいと思いますが、このように、時代の流れを反映された内容を豊富に盛り込んでいます。

余談なのですが、痛風には、アルコールが増悪させるのですがビールが特に悪いと書いたところ、後日に大手ビール会社から問い合わせがあり、その根拠を尋ねられました。ビールの中に尿酸を排泄する酵素を抑制する物質が２種類入っているという論文があることをお伝えすると、半年したら、その会社は研究をして、その成分を抜いたビールを商品化されたというような反響もありました。

八木：それはなんという銘柄でしょうか？これから私はそれを飲むことにします（笑）。

＜大阪公立大学共同出版会の役割と期待＞

八木：最後になりますが、これから出版会に対する期待などありましたら、教えていただきたいです。現在、大学と出版会は別法人なので、包括協定を締結してはどうかというお話をいただいて進めているところです。このあたりについてはいかがでしょうか。

西澤：まず、何をするかということを明確にした方がいいと思います。協定を結ぶことには意義があると思います。その場の情報は、どちらかというとメディアの方やネットの方が早いので、むしろ記録を残していくとかそういうものの方が本にふさわしいと思います。そういう意味で、大学にとってのメリットのある書籍で、一般には簡単には作れないというようなものを積み重ねていくのがいいと思います。

八木：今回の包括協定を進める中で「大阪公立大学共同出版会」の「共同」を外し、OMUPはOsaka Metropolitan University Pressの略にしてはどうかというお話も公立大学法人理事の先生からいただいておりましたので、次回のOMUPの総会にかけ定款を変更してそのように進めさせていただきたいと思います。

西澤：なるほど。それは素晴らしいことですね。

八木：ありがとうございます。包括協定で具体的に何をやるのかということは、公立大学法人理事や事務の方とも今後相談させていただきます。大学図書館とは、OMUPから発行し絶版になった教員の本をリポジトリーに残すということを以前から進めておりますので、共同でやる仕事の１つとして今後も続けたいと思っております。学部の紹介や大学の紹介など、これまで冊子として発行されていたものを、今後も無料で配布するとしても、ISSNあるいはISBNをとっておけば価値があるものになり、大学にとっても意義あることかとも思います。

西澤：そうですね。貴重な写真なども残る可能性がありますね。

八木：ではこのあたりでインタビューを終わりにさせていただきたいと思います。本日は貴重なお時間をいただき、多くの質問にお答えしていただきまして、どうもありがとうございました。

西澤：こちらこそありがとうございました。

公立大学法人大阪理事長　西澤 良記（右）
OMUP 理事長　八木 孝司（左）

第１７回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告

令和４年６月18日（土）午後３時から４時まで、大阪公立大学中百舌鳥キャンパスB14号棟２階研修室において、第17回NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）の総会が開催された。総会成立の確認後、八木孝司理事長を議長に選出し、さらに大塚耕司常務理事と山東功常務理事を議事録署名人に指名して、議事に入った。第１号議案「令和３年度事業報告」では、廉価で少部数の教科書を出版できるOMUPユニヴァテキストシリーズの刊行を開始したこと、「大阪公立大学教員が選んだ新入生に薦める100冊の本」を作製したこと、新たなHPを開設したこと、図書の刊行にあたり、著者、編集者、編集長、事務局および印刷所における一連の作業がより効率的に、より正確に行われるようにマニュアルに従って各作業を実施していること、出版は11件と、前年度の６件からかなり回復したものの、新型コロナウィルス禍の影響がまだ残り、前年度のような給付金がなかったことにより、赤字決算となったことなどが報告され、満場一致で承認された。第２号議案「令和３年度活動計算書」は、表に示す通りである。生田英輔監事より「適法かつ正確である」と認め、署名捺印したことが報告され、満場一致で承認された。第３号議案「役員等の任期満了による改選」では、中井孝章が常務理事と理事を、上田純一が常務理事を、小股憲明が理事を退任することが報告されたほか、辻洋を新たに理事に選任することが提案され、満場一致で承認された。なお、理事長および常務理事は令和４年８月８日に理事の互選によって決定され、新役員の任期は令和６年（2024）３月31日までである。第４号議案「業務契約」では、杉本公認会計士事務所との顧問契約、事務局業務に関して湯井順子、西本佳枝との雇用契約、出版物編集業務について川上直子、中村奈々、田野典子、谷角素彦と業務委託契約を継続することが提案され、満場一致で承認された。第５号議案「定款の改定」では、この法人を、特定非営利活動法人大阪公立大学出版会と称し、その略称をOMUP（Osaka Metropolitan University Press）と称すること、顧問の職務を付け加えることが提案され、満場一致で承認された。第６号議案「公立大学法人大阪との包括協定について」では、当法人と公立大学法人大阪との間に包括的な相互協力協定を締結することが提案され、公立大学法人大阪側での審議を経た後、締結手続きに入ることが提案され、満場一致で承認された。第７号議案「令和４年度事業計画」では、受託出版事業として研究報告書、博士論文、研究叢書、退職記念論文集、大学史・研究室史・クラブ史などの出版を働きかけることのほか、出版物の受託販売事業、OMUPブックフェアの開催、出版目録の作成と配布、ニュースレターの発行、「大阪公立大学教員が選んだ新入生に薦める100冊の本」の発行、ホームページおよびフェイスブックの運営、OMUPサロンの開催など、おおむね前年度と同様の事業を展開することが提案され、満場一致で承認された。第８号議案「令和４年度活動予算」では、表に示すような予算が提案され、満場一致で承認された。（文責：中村治）

令和４年度予算書

（単位：円）

科　　目		R3 決算額	R4 予算額	差　異
事業収入				
書籍売上		4,100,691	4,400,000	299,309
出版収入	著者負担	2,001,329	3,000,000	998,671
〃	大学負担・出版助成等	6,876,332	7,000,000	123,668
寄付金収入		0	0	0
入会金収入		70,000	50,000	−20,000
その他の収入				
受取利息		36	30	−6
雑収入		19,901	0	−19,901
当期収入合計		13,068,289	14,450,030	1,381,741
売上原価				
期首商品棚卸		1,466,851	1,385,960	−80,891
製作費		5,758,068	6,000,000	241,932
運送・発送費		574,619	600,000	25,381
編集デザイン料		469,639	600,000	130,361
内部仕入				0
期末商品棚卸		−1,385,960	−1,350,000	35,960
管理費				
雑給		4,138,550	4,200,000	61,450
福利厚生費		460,397	460,000	−397
業務委託費		409,091	410,000	909
旅費交通費		363,716	400,000	36,284
通信費		64,962	70,000	5,038
会議費		2,499	20,000	17,501
地代家賃		76,500	70,000	−6,500
水道光熱費		31,448	32,000	552
保険料		120,600	120,600	0
著者精算		1,010,173	1,100,000	89,827
消耗品費		15,964	20,000	4,036
租税公課		600	1,000	400
事務用品費		72,814	80,000	7,186
広告宣伝		8,336	50,000	41,664
支払手数料		57,925	70,000	12,075
法人税等		70,004	70,000	−4
当期支出合計		13,786,796	14,409,560	622,764
当期収支差額		−718,507	40,470	758,977
前期繰越収支差額		5,520,577	4,802,070	−718,507
次期繰越収支差額		4,802,070	4,842,540	40,470

リレーエッセイ（３）

闘病記は医療資源

OMUP編集長
金井 一弘

●大阪公立大学の闘病記コーナー

大阪公立大学羽曳野図書センターには、闘病記文庫・愛称「さくらんぼ」がある。一方、阿倍野医学図書館にも闘病記コーナーがある。他大学や公共図書館、病院内図書室を探しても、これほど闘病記を集めているところは少ない。大阪公立大学が有する貴重な財産である。

闘病記とは、病と直面する本人、あるいはそれを側で支える家族が、その記録や思いを綴った書物のことだ。

闘病記を学術的にとらえると、患者の本音が書かれているということに尽きるだろう。医療や看護あるいは介護の現場に就く者にとって、患者の本当の気持ちを知るための医療資源である。

患者は医師や看護師の前では「患者のフリ」をするといわ

阿倍野医学図書館　闘病記コーナー

れる。つまり、医師に嫌われたくないから良い患者のフリをするというのである。しかし、「本当はこうしてほしかった」「あんないい方はしてほしくなかった」「もっと話を聞いてほしかった」などなど、様々な患者の本音が書かれている。

かつて、ある病院では看護師たちが闘病記の読書会を催していた。たとえそこまでしなくても、医療従事者には自然体で闘病記に触れてほしいものだ。

●闘病記は玉石混交

闘病記は玉石混交であることを否定できない。自分の気持ちしか書かれていない人生訓のような本、タレントや社会的に著名な人物によくみられる自慢話や苦労話を押し付けたような本、はては健康商品や宗教、エビデンスのない民間療法へ導くような本もある。

良質な闘病記とは、①医療情報（治療方法や手術の内容など）がきちんと書かれていること、②家族、親戚、友人、同僚、医師、看護師など人や社会との関わりが描かれていること、この２つのポイントが押さえられているものをいう。

ただ、それを膨大な闘病記の中から探し出すのは大変労力を要する。そこで、参考になるのが、がんだったら公益財団法人日本対がん協会など、信頼できるところが紹介している闘病記ということになる。

大阪公立大学の闘病記コーナーも、内容を吟味して良質な闘病記を紹介できる機能を有してほしいと切望する。そのためにはよく利用され、利用者からの書評を図書館側が受け取り集積する機能があっても良いのではないだろうか。

●闘病記の役割

闘病記から学べることは、患者の本音を知ること以外にもある。

①病気になった時の心構え

闘病記を何冊か読んでおくと、たとえばがんの告知を受けた時、家族が大病に直面した時、ただうろたえるのではなく、適切な行動を取るための心構えが備わる。

さらに、たとえば脳卒中（脳梗塞、脳出血、くも膜下出血）になるとどのような状態になるのか、その後遺症として出現する麻痺や高次脳機能障害にはどのようなものがあるか、どう対応したらよいかを発症前に知っておくことは、知らずにいて戸惑うことよりはるかによいと思う。

②退院後の生活について

退院後の生活については医療従事者から詳しくは教えてもらえない。家族はどのように患者本人と向き合っていったのか。再発や転移、副作用の不安とどのように付き合ったのか。就労や結婚・出産について、あるいは医療費や生活費はどのように工面したのか、などなど。すべての闘病記に詳しく書かれているわけではないが、そこは何冊か読んで情報を拾い上げてほしい。

③最後にもう１つ、それは「生きる勇気」を受け取れること

闘病記の著者は、貴重な自分や家族の体験を、同じ病気に直面する患者やその家族に役立ててほしいという強い思いで書く。そこには人生を前向きに生きようとする一人の人間の生き様がある。その生き様に触れることで読者は心がふるえ、感動する。あるいは腑甲斐ない自分を省みて涙することもあるだろう。「なんてちっぽけなことで悩んでいたのだろうか」と。

もし学生諸君で、心のよりどころを求めたい時は、ぜひ闘病記を読んで「生きる勇気」を受け取っていただきたい。

●病種によっては古い本も価値がある

日本では、闘病記は出版物の１つのジャンルとして確立したといえる。書店に流通しないものも含めると、年間150冊ほどは出ていると思われる。

そのため新しい闘病記に目が行ってしまう。特に、がん治療においては、日進月歩で開発が進むため、闘病記も最新のものを読みたくなる。しかし、患者の本音を知るということでは、古いものでも優れたものがあることをお伝えしたい。

この原稿を書いている時点では、膠原病やパーキンソン病、糖尿病や各種依存症などは、ここ20年間で革新的な治療法は登場していない。認知症やうつ病もそうかもしれない。だから、たとえ何年も前に書かれた闘病記であっても、逆にその本の評価が定まって、内容が優れていると紹介されているのであれば読む価値がある。

ぜひ、大阪公立大学が有する闘病記という財産を、もっと活用してほしいと切望する。

羽曳野図書センター　闘病記文庫さくらんぼ

自著を語る（37）

国際開発ソーシャルワーク入門

著者：東田 全央
A5判、並製本、126頁
定価880円（本体800円+税）
978-4-909933-26-3 C3036

「国際社会福祉」や「国際ソーシャルワーク」とは何か。そして、大学教育においてそれらの関連科目を担当するとしたら、どのようなことを教授できるであろうか。私自身の国際開発分野でのソーシャルワークの実践および研究の経験も大学教育に生かすことができるだろうか。これらの自問から拙著『国際開発ソーシャルワーク入門』を上梓するに至った。

私は令和３年度に大学教育において国際福祉論という科目を担当することになった。国家資格である社会福祉士等の養成にかかわる科目については、厚生労働省が定めるカリキュラムと教育内容が提示されているが、国際福祉論はそれに該当しない。つまり、本科目のシラバスや授業計画は大学教員の裁量によるところが比較的大きい。実際、日本の国公立大学の社会福祉系カリキュラムを分析したところ、国際福祉に関する科目において、テキストや教授方法は様々であるように見受けられた。そこで、関連する論文や書籍等をレビューしたうえで、試みとして授業教材を作成してみることにした。

拙著の主な読者層は本科目履修者を含む社会福祉を学ぶ学生と想定した。学生に少しでも身近に感じてもらえるような入門テキストを作成することにした。内容については、各国の社会福祉施策の国際比較等よりも、国際開発や国内外の現場を想定しながら、一人ひとりのソーシャルワーカーに求められるグローバルかつローカルな視点等に焦点を当てることにした。拙著には国際ソーシャルワークとみなせる内容や視点も含まれるが、焦点を絞って試行的に執筆したものでもあり、それと同義に語ることは憚られた。先行文献を踏まえた結果、国際開発の文脈におけるソーシャルワークという限定的な枠組みの下で同タイトルを付した。

出版にあたっては、院生時代の母校が大阪府立大学大学院であったこともあり、OMUPに企画を相談させていただいた（以前に、「OMUPブックレットNo.66　もう一つのソーシャルワーク実践－障害分野・災害支援・国際開発のフロンティアから－」も発刊済み）。本科目の履修人数は当初不明であったものの少数であることが見込まれ、OMUPの少部数教科書出版システムを利用させていただくことにした。他方、拙著が、国内で、国際ソーシャルワークに関する議論のたたき台の一つになればとの思いもあったことから、市販にも流通させていただくことにした。

拙著テキストを使用してまだ日は浅いが、国際福祉論の科目開講を通じての所感も記しておきたい。本科目では、拙著テキストに概ね沿いながら進めることができた。履修者が少人数ということもあって、講義だけではなく、演習の形態（アクティブ・ラーニング）も含む形で授業を行うことができた。拙著テキストにも明示しているレポート課題にも学生は取り組み、興味深いテーマについて議論している。学生からは、たとえば、「今までもソーシャルワークの国際定義等は他の授業で習うことがあったが、このテキストでは、より具体的な考え方や取り組みを学ぶことができた。」、「多くの関連分野の内容が、本文やコラムの中で触れられていて、興味を持ちやすい。また、ある意味マイナーな内容の教科書が廉価で手に入るのはありがたい。」との声を受け取った。他方、「本文が白黒なため、重要語句を強調する等の見やすさが必要と感じた。」との意見等もあり、改善の余地も認識した。

拙著テキストを含む国際福祉論の教育開発については、学術集会で発表する機会も得て、研鑽に努めた。今後も、国際ソーシャルワークにかかわる実践や教育研究のあり方について引き続き探求しながら、新たな取り組みにも邁進していきたいと考えている。

（淑徳大学）

自著を語る（38）

観光列車の経済学的研究
―地方鉄道の維持振興と地域活性化に向けて―

著者：藤田 知也
B5判、並製本、225頁
定価3,080円（本体2,800円+税）
978-4-909933-27-0 C3065

本書のタイトルにある「観光列車」が私の研究対象である。観光列車は一般に、観光目的の旅客を輸送するために導入される特別な車両のことを指す。今では多くの鉄道事業者で観光列車の導入が見られているが、この動きが活発化したのは2010年代中頃からである。観光列車と地域活性化に関する研究をしたいと強く思い、研究者を目指すために大学卒業後に勤務していた鉄道事業者を辞め、関西大学大学院の修士課程へ進学した2016年には、観光列車の研究対象とした先行研究は殆ど無く、現実には観光列車という新たな動きが見られているものの学術的な側面からはフロンティアであった。修士課程在籍時、ある先生からは「君には王道の交通経済学研究者になってほしい」と言われたことがある。当時の私にその見込みがどれほどあったかは分からないが、観光列車の分野があまりにも未開拓であったことから、「将来研究者として

食べていくためにも、まず先行研究の蓄積がそれなりにあるところで業績を挙げて、就職してから観光列車の研究をやりなさい」という意味の込められた極めて現実的な助言だったのだと私は理解している。勿論これには納得するところもあったし、実際に、後に公刊された私の初の査読論文は、地方鉄道を対象としているものの観光列車は関係ない。しかし、観光列車に関する研究をするために会社を辞めたことを考えると、観光列車をテーマから外すわけにはいかない。私の頑固な性格が現れたのである。結局、初志貫徹で修士論文でも、先述した初の査読論文に関わる部分を除いては観光列車に費やし、大阪市立大学大学院の博士課程に進学した後も観光列車をテーマに研究をし続け、観光列車に関する研究業績を順調に挙げることができた。

そして、観光列車１本で書き上げた私の博士論文をまとめたのが本書である。件の現実的なアドバイスを無視し、交通経済学研究者としては王道どころかむしろ異端児となってしまった。しかし、私が観光列車に関する研究業績を積み重ねていくと、他の先生方も観光列車研究に参入してこられた。これは、自分で言うのも些か憚られるが、観光列車研究の先陣を切って突き進んできた身としては、自らがやってきたことが間違いではなかったなと思えるこの上ない喜びであった。

こうした意味からも、本書はフロンティア精神を持ち、観光列車という学術的な観点からは未開の領域を経済学的な視点から切り込んでいった軌跡とも呼べるだろう（余談だが、私が大学教員として初めて着任し勤務している北海学園大学の建学の精神は「開拓者精神」である）。　（北海学園大学）

自著を語る（39）

TANKA《カタルーニャ語短歌》私語
日本古典文学が海外へ与えた影響の特殊例

著者：小林 標
B6判、上製本、220頁
定価3,960円（本体3,600円+税）
978-4-909933-29-4 C3087

『TANKA《カタルーニャ語短歌》私語』という本を昨年11月に出版したのだが、表題からして理解しがたい書で半年経って自著を語るにしても、反響がいかに乏しかったかを書くための情けない文になる。

カタルーニャ語とはスペイン国で話されている四つの言語の一つで話者は約600万人とされている。その文学史はスペイン語文学以上に古く遡るし、ラテン語の子孫として西洋古典文化の伝統を分かち持つ点でも他の少数言語とは異なり、スペイン第二の都市バルセロナを首府とするカタルーニャ州において行政・教育等で公的第一言語となっている。そのカタルーニャ語文学に存在する、そしてスペイン語文学には存在しない、ある伝統を詳述したのが本書なのである。スペインが内乱の最中にあった1930年代に始まり現在にまで続く、短歌と同じく57577の音節からなりtankaという名称を持つ五行詩創作の独自な伝統である。

こんな書物の読者はどこに見つけられる？ 早稲田大学招聘研究員であるGerlini博士は私に「カタルーニャ語に日本語というコンビネーションを専門にする学者は稀でしょう」と書いて来られた。まことにもっともで現在の日本にはカタルーニャ語の知識は殆どない。国内のスペイン語関係者でカタルーニャ語を自由に読める方には一、二名しかまだお目にかかっていない。フランス語専門家だとてプロヴァンス語は読めないのと同じことで、スペイン文学専門家ならカタルーニヤ文化事情にも通じていると期待するのは不合理である。

私は自分の個人的知己以外にも読者を求めたく、日本古典文学と海外との関連を扱うtranslation studiesなる用語でも表される仕事に携わっている方々のお名前を探った。科研での「海外における平安文学及び多言語翻訳に関する研究」の関係者などが一例である。調べた上での17名ほどのそのような方々への送呈は、日本人に限ってみれば本当に無駄であった。名前をアルファベットで書く人以外で、受け取りだけでも書いて来られた人は一人しかいない。あとはただ無視である。

私は知り合いに西洋古典学専門家を持つことを幸福に思った。日本文学と海外との関連などには無縁でもラテン語が読めてフランス語にも知識がありカタルーニャ語の原文と拙訳とを対照させて解読する意欲がある。何よりもラテン語詩の末裔の一形態であるカタルーニャ語詩をも知識内に取り込む意志があって独自の感想までも書いて来られる。

拙著に対する態度における専門家間での対比の極端な例を書いておくのもよかろう。ギリシア文学の逸身喜一郎氏は拙著に「驚愕した」と、そしてある国文学専門家にこの稀なる例の情報を伝えると返事には「興味津々です。ご芳情に浴せれば幸いです。お手数ですが、お送りいただけますでしょうか」とあったと、書いて来られた。添えられた住所にお送りしたのだがご当人である国文学研究資料館館長からの返答はない。同資料館の教授で百人一首も含めた日本古典に関する国際シンポジウムに参加していた方にも送ったがこちらからも無音。他の例は省略する。

古典学以外では、レオナルド・ダ・ヴィンチ研究で知られる斎藤泰弘氏はカタルーニャ語へ翻訳された和歌をイタリア語に逐語訳することで日本語原文との三者三様なる対照を試みて楽しんでおられた。海外からは、現在の国際郵便事情の困難さを乗り越えてフランス、スペイン、イタリアなどからの反応が届いている。それらについては別の文で扱うこととなろう。　（大阪市立大学名誉教授）

新刊書の紹介

中小製造企業の技能形成と職場類型　中国へ進出する中小製造企業を踏まえて

著者：津川 礼至

A5判、並製本、110頁
1,815円（本体1,650円+税）
978-4-909933-35-5 C0034

OMUPユニヴァテキストシリーズ①
チョウから学ぶ遺伝学　改訂版

著者：八木 孝司

A5判、並製本、128頁
1,210円（本体1,100円+税）
978-4-909933-34-8 C3045

教育の〈不可能性〉と向き合う
―優生思想・障害者解放運動・他者への欲望

著者：森岡 次郎

A5判、上製本、170頁
2,200円（本体2,000円+税）
978-4-909933-33-1 C0037

福祉環境デザイン原論
居住のブリューイング

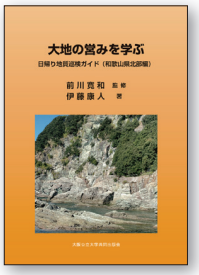
著者：森 一彦

46判、並製本、208頁
2,090円（本体1,900円+税）
978-4-909933-36-2 C1036

OMUPブックレット　NO.67
住宅と福祉の連携　―居住政策の実現に向けた「協議会型アプローチ」―

著者：佐藤 由美・阪東 美智子

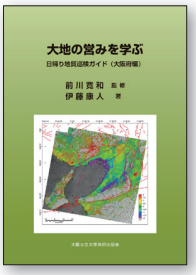
A5判、並製本、84頁
880円（本体800円+税）
978-4-909933-32-4 C3336



大地の営みを学ぶ
日帰り地質巡検ガイド
（和歌山県北部編）

著者：伊藤 康人

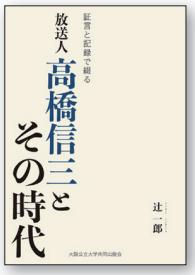
A4判、並製本、60頁
1,650円（本体1,500円+税）
978-4-909933-31-7 C2044



大地の営みを学ぶ
日帰り地質巡検ガイド
（大阪府編）

著者：伊藤 康人

A4判、並製本、60頁
1,650円（本体1,500円+税）
978-4-909933-30-0 C2044



証言と記録で綴る
放送人高橋信三とその時代

著者：辻 一郎

A5判、上製本、583頁
3,850円（本体3,500円+税）
978-4-909933-28-7 C0023

TANKA《カタルーニャ語短歌》私語　日本古典文学が海外へ与えた影響の特殊例

著者：小林 標

B6判、上製本、220頁
定価3,960円（本体3,600円+税）
978-4-909933-29-4 C3087

観光列車の経済学的研究
―地方鉄道の維持振興と地域活性化に向けて―

著者：藤田 知也

B5判、並製本、225頁
定価3,080円（本体2,800円+税）
978-4-909933-27-0 C3065

国際開発ソーシャルワーク入門

著者：東田 全央

A5判、並製本、126頁
定価880円（本体800円+税）
978-4-909933-26-3 C3036

アフラ・ベーンと演劇について
―ひとつの演劇論―

著者：近藤 直樹

A5判、上製本、244頁
定価2,970円（本体2,700円+税）
978-4-909933-25-6 C3098

魚に心あれば水に心あり
教育研究の国際交流抄

著者：辻 洋

A5判、上製本、144頁
定価1,650円（本体1,500円+税）
978-4-909933-37-9 C0037

編　集　後　記

今年度の年次総会が無事に終了いたしました。今号は、トップページに４月に新しく開学した大阪公立大学法人理事長との対談を掲載しております。今後も弊会は、書籍・教科書出版を希望する方々のために尽力いたします。書籍を出版するにはどのような流れで期間はどのくらいかかるのか等、少し知識があると出版することが身近になるかと思います。お時間がございましたら、お気軽にOMUPにお立ち寄りください。お待ちしております。（文責：湯井順子）

令和４年度　スタッフ一覧

【理事】
八木　孝司（理事長）
中村　治　（常務理事）
山東　功　（常務理事）
大塚　耕司（常務理事）
金井　一弘（常務理事）
内藤　裕義（常務理事）
上田　純一
難波　利幸
前川　寛和
平井　規央
伊藤　康人
吉田　敦彦
辻　　洋
平澤　栄次

【顧問】
足立　泰二（兼理事）
三田　朝義（兼理事）
小股　憲明

【監事】
上野山　達哉
生田　英輔

【事務】
西本　佳枝
湯井　順子

【編集】
川上　直子
中村　奈々
田野　典子
谷角　素彦

〒599-8531　大阪府堺市中区学園町１－１
大阪公立大学中百舌鳥キャンパス内
NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）事務局

電話：072-251-6533　ファクシミリ：072-254-9539
e-mail：omup@omup.sakura.ne.jp
ＵＲＬ：http://www.omup.jp/